

講演抄録

考古学からみた古事記と古代房総・安房

—景行天皇と倭建命東征伝説を中心にして—

安房歴史文化
研究会会長

天野 努氏

今年古事記が編纂されてちょうど1300年にあたる。奈良や出雲、宮崎などではメモリアルイベントがさかんに行われている。この機会に、古事記がこの地域について記述した部分と、それに関係するよつな最新の考古学発掘調査の結果を紹介し、その関連性の有無について考察してみたい。

古事記の中巻、景行天皇の段には房総に関する記載がある。

天皇の御世に東国の「淡水門」(あわのみなと)を定め、膳大伴部(かしわでのおおともべ)を定めた。また東国征討のために倭建命

あり、そこに磐鹿六雁(注:高天神社にまつられる料理の祖神)のエピソードが出てくる。ちなみに「走水の海」は浦賀水道、「淡水門」は館山湾とも考えられている。

また東国征討が実在したと仮定すると、その年代は4世紀ごろと

ヤマトタケル伝説に真実味
史書と古墳がオーバードラップ

考えられる。

さて、その時代の古墳に目を移すと、東国の3世紀の古墳は前方

後方墳が大半を占めていたのに対し、4世紀には大型の前方後円墳が出現する。房総では小櫃川、養老川、村田川流域に集中する。

三浦半島の逗子市・葉山町の境界で平成11年、長柄・桜山1号墳、2号墳という2つの大型前方後円墳が発見さ

マークになることを意識してつくられたと考えられる。埋葬者は大和王権とつながりの深い首長と思われる。この古墳が発見されたことで「ヤマトタケルの伝説」が真実味を帯びてきたと私は考えて

いる。東京湾をはさんだ木

れた。標高1000メートルもある山に築かれた。200メートルの長さ、相模湾や富士山が一望できる。ともに壺型埴輪などが出土している。直下の沖積地の集落遺跡からは銅鏡や銅製の鏃(矢じり)、石釧など天和王権と直結するような出土物もあった。

更津市の矢那川沿いには手古塚古墳がある。墳丘長60メートルの前方後円墳。今は海岸が埋め立てられているが、眼下に東京湾、三浦半島が望め、海岸から最も近い場所につくられている。

三角縁神獣鏡や、畿内のもつみられる朱器篋などが出土。籠手

や銅・鉄製の鏃なども出た。遺物からみて、この古墳は4世紀前半のものともみられている。埋葬者は畿内と強い関係を持った武人と考えてさしつかえないだろう。

姉崎古墳群(市原市)の釈迦山古墳。これは手古塚と同時期か一段古い前方後円墳だが、畿内のものでよく似た高坏や、東海地方の「S字甕」が出土している。このように考

古学からみると、古事記、日本書紀に書かれている「東国征討」としては恩田原古墳(南房総市久枝)や永野台1号墳(同市石堂)などがある。

安房はこれまで大きな古墳がない場所と言われてきたが、2年前に報告書がまとめられた萱野遺跡(館山市)の発掘調査では大型方墳(一辺34・2メートル)

るいは前方後方墳(62メートル)ではないかと言われている。出現期(3世紀ごろ)としては東日本最大級の古墳が見つかった。

この萱野遺跡からは伊豆・新島産の流紋岩を使った石器が多く出土している。当時の海上交通をにらんでいた集落がこの地に存在し、古墳はその海上ルートを支配していた首長の墓と考えられる。

安房では4世紀の古墳は見つかっていないが、5世紀後半のものが、5世紀後半のものとしては恩田原古墳(南房総市久枝)や永野台1号墳(同市石堂)などがある。

(本稿は、館山コミュニティセンターで9月30日に行われた安房歴史文化研究会公開講座の内容を要約、再構成したものです)



天野 努氏